

研究経過報告（平成元年5月～11月）

吉 崎 一 人

5月に着任したが、まだまだ教官としての自覚、技量ともに持ち合わせておらず、日々努力している。

私の当面の中心的テーマである「学習経験の処理半球優位性への影響」に関する実験は、着任してからは残念ながら行っていない。正直なところ、ここで経過を報告するほどのことはない。しかしながら、着任した1年目であること、平成の1年目であること、の記念すべき2点を思慮し、私の中心的テーマについての5月からの取り組みについて2点報告することにする。

1) これまでの研究結果の一部を“Shift toward left visual field advantage by short-term learning experience”としてまとめ、“Brain & Cognition”に投稿した。

これは、修士研究の延長として行なわれたものである。直接学習経験を操作して処理の半球優位性の変動を検討した従来の研究は、左半球優位方向への移行を示すものばかりであった。これらの知見は、刺激に対する学習がその刺激情報に対する処理過程に変化をもたらし、それにともない処理半球の優位性が変動したと考えられた。しかしながら、これまでにえられた知見が左半球優位方向への移行を示すものばかりであることから考えると、刺激と学習材料との連合（学習経験）それ自体が、左半球優位方向への移行をもたらしたという仮説も考えられる。今回の投稿中の論文は、この仮説の反証を示すことを目的とするものであった。

結果は、学習材料の種類によっては、右半球優位方向への移行も生じることが示され、連合自体が左半球優位方向への移行をもたらすという仮説を反証することができたと思われた。

2) 「学習経験からみた大脳半球機能差（仮題）」という論文の執筆に取り組んでいる。これに関してはまだ試行錯誤的であるが、レビューを含み、研究の今後の方向

性を探索するようなものを目指している。この論文の作成を始めた理由は、自分の研究を少し広い視点で眺め、現時点での考え方を整理するためには、“書く”ことが必要であると感じたからである。

あらためてこの論文の目的をあげると以下の2点となる。1) 大脳半球機能差研究に対して心理学が貢献する新たな可能性を示すこと、2) 心理学領域に対して、大脳半球機能差研究からの視点の有効性を示すこと。

まだめどの立たない論文ではあるが、なるべく多くの方のコメントも参考に議論を展開し、自分に役に立つようなものになればと思っている。以下に論文の構成をあげる。

1. 学習経験に焦点をあてる理由

1-1 “大脳半球機能差”の概念の変化から

1-2 方法論上、解釈上の問題から

2. 学習経験との関連性を示唆する研究

2-1 グループ間の差に注目した検討とその問題

a 音楽

b そろばん

c (第2)言語習得過程

d 文化差

e 学業成績、学習障害、SES、聴覚障害

2-2 刺激の違いに依存した検討とその問題点

a 字体

b 顔認知

2-3 練習効果に注目した検討とその問題点

3. 直接学習経験を操作した実験室的検討

1. 新たなパラダイムとして

2. 実験的検討レビュー

3. 問題点と今後の展開

4. 結 論